

米子水鳥公園

レンジャー通信

水鳥公園の指導員(レンジャー)によるさまざまな活動をご紹介します。

☎米子水鳥公園 (☎24-6139)



238種類目のオオノスリ

令和3年1月2日、お正月の臨時開園中に、気になるタカが観察されました。一見、園内でよく見られるノスリのようでしたが、発見した島根大学の学生さんが違和感を覚えたのです。学生さんが撮影した写真を職員が精査した結果、このタカはオオノスリだと分かりました。

オオノスリはノスリより大きく、尾羽に横縞模様が多数あり、翼の羽の根元が白いことなどが特徴です。水鳥公園初記録で、通算238種類目の鳥となりました。オオノスリはその後も園内に現れ、3月25日まで観察されま



飛ぶオオノスリ

した。クロマツの枝先や、つる植物の塊の上など、見晴らしの良いところにじっと止まっていることが多く、時々他のタカが食べ残した獲物を食べていました。



体がたくま大きく風格がある

オオノスリは、全長や翼を広げた横幅はトビと同じくらいですが、トビよりも体が太いのでさらに大きく見えました。そして、じつとたたずむ姿には、大型のタカならではの風格がありました。他のタカも、見慣れぬオオノスリを意識していて、オオノスリを見かけると急降下して威嚇していました。野鳥ファンだけではなく、他のタカからも注目を集める鳥でした。

米子水鳥公園統括指導員 桐原 佳介

美術館通信

とだかいてき 戸田海笛 《喜怒哀楽の図》

美術館の玄関横にあるこのブロンズレリーフ、もともとの作品(石膏レリーフ)は1917~20年頃、米子市出身の彫刻家・戸田海笛[1888~1931]により制作されました。しかし、作品があまりに大きすぎて注文主に納められず、当時海笛が滞在していた茨城県の結城細商たちにより引き取られました。それから約100年の時を経て、2016年有志の皆さんにより新たに铸造された《喜怒哀楽の図》ブロンズレリーフが本市へ寄贈、設置されました。横7mを超える大画面には『古事記』のエピソードなどをもとに、多くの人物や動物が表情豊かに表現されています。昨年末、設置から5年を機に作品のクリーニングを行いました。よく見ると今年の干支であるトラもいます。わかりますか？

☎米子市美術館

(☎34-2424、FAX 33-0679)



《喜怒哀楽の図》ブロンズレリーフ部分